村づくりの先覚者

高橋豊明

高橋豊明は、北股村と南股村そして下衣川と分かれていた衣川村の学区に「村は一つ」という考えのもとに中央学区を設け、三衣川の生徒が共に学ぶ新衣川小学校の開校の基礎を作りあげた。また、それまで村長の職には、三衣川の高齢者があたるという習慣を改め、村の発展のために、若手の適任者を長期間勤められるような体制に整えた人である。

豊明（旧名豊治）は一八五七（安政四年）四月十五日、上衣川（現・衣川区）に父東右衛門と母ツネの長男として生まれた。

豊治が九歳のときに実の母親が死去。六年後に二人の子供を持つ継母をむか迎え、一五歳にして四人の兄弟を持つことになる。また、継母はその後五人の子供を生んだので、十人の兄弟となった。

豊治が十二歳のとき、右ひざに悪性の腫れものができ、治療のため村内ただ一人の医師小幡敬順のもとに通う。これがきっかけとなり、その私塾（寺子屋）で学ぶことになる。

治療は長くかかり、ついには治らずに歩行が困難になってしまう。しかし、足の障害を負い目としないで、むしろ転機として、私塾で日常生活を通じて修養に励んだ。「修身斉家治国平天下」（身を修め国を治め天下を平らげる）という寺子屋で学んだことを生涯の指針として貫きとおした。

豊治は模範少年で「二宮金次郎の再来か」といわれるほど、よく働き、しかも笑顔を絶やさず、九人の兄弟の面倒をよくみた。兄弟全員が兄を心から信頼し、兄のいうことには、素直に従うようになった。これは、このようにありたい思ったことは、ためらうことなく実行する性格だったからだといわれている。十人兄弟の兄としての役割を見事に果たしのであった。

晩年、よく孫たちに「わが家を斉えることができない者に国を治めることができようか、修身も斉家もできない政治家は村も国も滅ぼす。」と語っていた。

一八八〇年（明治十三年）、二十三歳の時、十五歳の妻を迎え一家の中心となった。年長の兄弟の協力を得ながら農業を営み、幼い兄弟の教育に気をくばる日々であった。

一八八一年（明治十五年）二十五歳には上衣川役場の事務員となり、翌年には戸長に選ばれた。上衣川村と下衣川村が合併し、新村

の筆頭書記となる。

三十四歳の時、父を亡くし、翌年には義母を亡くす。名実ともに一家の長となった。

そのころ、村内に同姓同名がいたので、豊治を豊明に改名した。しかし「とよあき」と呼ぶ者はほとんどなく、「ほうめい」と呼ばれた。

その後、豊明は、村会議員、胆沢郡会議員、衣川村長、水利組合議員、産牛馬組合議員、学務委員、衛生組合長など、村民から推選され多くの役職についた。

衣川村には、藩政時代以前から「三衣川」の通称があり、北股、南股、（二つをあわせて上衣川）下衣川（衣里）の三つで成り立っていた。しかし、この三つは、対立意識が強く、史跡や伝承地でも

「こちらが本当だ。」

「おらほが初じまりだ。」

と双方が主張してゆずらないことがしばしばあった。利害関係がある場合は感情的な対立に発展し、解決には時間がかかることがしばしばあった。

豊明は、この難しい問題の解決策として、小学校の学区を変えることを思いつく。三衣川の中心部に新しい学区を設けて、三衣川の生徒が一緒に学ぶ新衣川小学校を設立して、

「村は一つ」

という意識改善の使命を担わせようと構想したのであった。

三地区の同意を得ることは難しく、四年間の村長の任期では果たすことができなかった。そこで豊明は、当時、衣川村に設置が認められていなかった農業補修学校を新衣川小学校に付設する運動を起こし、新衣川小学校の魅力を高めようと努力した。また、下衣川出身の初代の村長である遠藤盛廣氏に後任を要請した。ついに三衣川の説得に成功し、一九一七年（大正六年）、念願の中央学区が誕生した。こうして、農業補修学校を付設した衣川尋常小学校が創立されたのである。

こうして、七代村長としての使命を終えた豊明は五八歳になり、一〇人以上の家族に囲まれて、悠々自適の生活を送ることができるようになった。

しかし、豊明には、公職上で果たさなければならないもう一つの課題が残っていた。

村長の職は、一期ごとに三衣川を順にめぐり、しかも高齢者があたるという習慣が残っていた。

豊明は、若手の適任者を選び、長期間ゆだねることが村の充実発

展につながるものと考えた。

そこで、一九二六年（昭和元年）七十歳になってあえて、二度目の村長に就任。翌年の一月までの八か月でその体制を整え、小野寺仁左衛門に後進を譲った。

小野寺仁左衛門は、その期待に応えて、連続五期一八年二カ月にわたって村長の職にあり、衣川に安定した村政を行った。

豊明が七二歳の時に長男が村にもど戻り、「斉家」の後継ぎを長男に譲り、「修身斉家治国平天下」を貫いた満足に浸ることができた。

妻と後継者夫婦、孫六人に囲まれ、孫に村の歴史を語ることを楽しみとして、八十歳の天寿を全うすることができた。

＊参考文献

『胆沢・江刺の先人物語』　著　者　高橋　利明
発行者　本平　次男

分水嶺に囲まれた衣川村